

◆ 延暦寺里坊

未指定文化財調査が

進行中です◆



絹本着色天台大師像

住吉具慶筆

一幅

二一五・〇×八五・五

住吉具慶（一六三一～一七〇五）は、土佐家門下の有力な画系、住吉家の二代目。土佐家の高弟であった初代如慶の作風を受け継ぐとともに徳川家関係の仕事をよく勤め、彼の地位はついに奥絵師並までに至りました。その仕事の背景には、先代の如慶から培われた、天海僧止を中心とした延暦寺・天台宗との関わりがあったのですが、本作はそれを示す作例であり、他にも同曲の画像を具慶は制作しています。落款には「法眼具慶謹図」とあることから、法眼位に叙任された元禄四年（一六九二）以降の晩年の作であることがわかります。なお、本作は描表装です。

平成六年十二月、比叡山延暦寺は世界文化遺産に登録されました。それを記念して、現在、大津市教育委員会文化課と大津市歴史博物館では、延暦寺および里坊各位の多大のご理解とご好意によって坂本の里坊の未指定文化財の調査を進めています。

この度の調査は総数六九カ寺にのぼる里坊群を対象としたもので、その期間は三年度にまたがるものです。ところで、里坊の文化財に関する調査では、かつて文化庁を中心とした文化財集中地区特別総合調査が昭和三七年に行われています。期間は八日間という集中調査でしたが、その調査範囲は広く、報告書「比叡山を中心とする文化財」をみると、山上は無論、山下の里坊のみならず周辺の関係寺院におよび、対象文化財もいわゆる美術工芸品以外にも、銅鐘や参籠札まで手がけたものとなっています。

もとより今回の調査の趣旨はまた別にあります。それは、その大規模な寺院数により、なお興味深い未指定文化財の確認が期待される里坊群を網羅して、その文化財状況を把握しようとするものです。

里坊各位のご協力のもと、月に数回のペースで日・一・二カ寺を順次巡り、対象の中心を仏教彫刻と近世絵画に絞り、重点的な調査を進めています。

初回の調査から現在でようやく十ヶ月近くを迎えますが、その成果は少なからずあがっております。今回は、調査の簡単な途中経過報告として、その成果の中から若干の近世絵画について紹介いたします。

（なお、県下では最近、社寺を狙った文化財の盗犯が相次いでおり、所蔵寺院名は匿名といたしました。）

絹本着色四季草花図

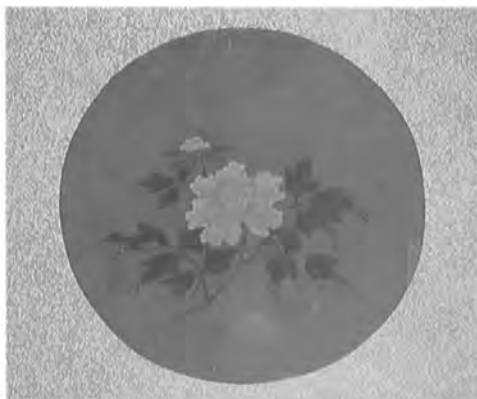
狩野洞春筆

四面

二六・八×二七・一(牡丹)

二〇・二×三一・〇(水仙)

牡丹・黄濁葵・桔梗・水仙が各々、色紙大の方形や内窓・团扇型の絹地に描かれる小品です。一見、細密画風でありながらその描写や彩色には以外とおおらかな所があります。また、モチーフには一目ではわかりにくいほどのかすかな筆づかいによる墨線があり、それらによって独特の仕上がりとなっています。落款には「狩野洞春筆」とあり、表絵師格の駿河台狩野家の人物であることがわかります。ただし、同家には洞春号の人物だけでなくも四人おり、そのいずれの人物であるか不明です。もともと作風から伺われる時代性を考慮すると、同家二代の洞春福信(養信)か、四代洞春美信のいずれかとみてよさそうです。



絹本着色文殊菩薩像 長谷川等鶴(等郭)筆

一幅

一八三・七×九一・〇

本作自体は無款であるものの、附属する短冊型の紙片には作者自身による落款と印章があります。それには「自雪舟五代法眼等伯七世ノ長谷川賀一郎謹拝書(印文不明)・[救馬助印]」とあり、桃山時代の巨匠、長谷川等伯の画系を名乗る人物による制作であると判明します。ちなみに、等伯の子である長谷川宗宅の系統の家系譜によると「十一代等鶴字信房 俗名賀一ノ等潤実子」という人物が記載されており、この人物と考えられます。等鶴は文化七年(一八一〇)に五四歳で没しているので、本作の制作時期も十八世紀末から十九世紀初頭あたりと思われるでしょう。その人念な仕事は等伯の画系にふさわしく、また、研究の空白地帯となっている江戸中後期の長谷川家(派)の仕事を考えるうえでも興味深い作例です。



紙本淡彩高士吟詠図 貫名海屋筆

二七・四×二八・二

貫名海屋筆

一幅

貫名海屋（一七七八一—一八六三）は、晋・唐の法帖研究に基づいた唐様の書風を打ち立て、幕末三筆のひとりに数えられる人物です。幼少の頃から学芸の素養を積んで儒学者・詩人として身を立て、その円熟が書画に結実されるという海屋のありかたはまさに文人の名にふさわしいものといえます。本作はその年記から弘化三年（一八四三）、海屋六九歳時の作であることがわかります。落款には「松翁」の号を用いています。これは松翁落款の作例として最も早い時期のものとなります。また、人物図である点も海屋画としては珍しいものであり、描かれる老士の味のある表情など、文人画家海屋の新鮮な側面を伝えるものです。



絹本墨画人物山水花鳥走獸図

鶴沢探索筆

六曲一双

一一六・〇×四九・三

五・一・三

探索（？—一七九七）は、禁裏御絵師として、御所の御用を担った鶴沢派の三代目宗家。格式ある画官（宮廷画家）として御調進をこなす一方、門跡以外の寺院や町衆向けの仕事も請け負い、顧客の拡大にも努めたようであり、遺作も思いのほか多く残っています。仕事のジャンルとしても、風俗画や祭礼絵が見られるほか、大津絵まで手掛けており、それまでの鶴沢宗家にはない旺盛さと幅の広さを見せておられます。本作は、家法である探幽様式を用いながらも、モチーフの扱いや描写は軽妙洒脱なものとなっており、探索ならではの感覚が伺われる探幽様式作品といえます。

なお、本作の形態は押絵貼屏風であり、図版は右の二図が片隻の一扇・四扇、左の二図が対片隻の三扇・五扇にあたります。

(横谷 賢一郎)



学芸員のノートから④

近江神宮所蔵考古資料の調査

昭和十五年、紀元二千六百年記念事業として、天智天皇ゆかりの地「大津」に近江神宮が創建された。この創建にいたる過程のなかで、同時に、天智天皇が遷都した大津京跡の所在を明らかにしようとする気運も高まりをみせ、昭和三・四年と昭和十三・十四年の二度にわたり、大津京跡究明を目的とする発掘調査が実施されることになった。対象地は、滋賀里集落西方の山中に立地する崇福寺跡と、南志賀集落内の南滋賀町魔寺の二か所が選ばれ、昭和三・四年は肥後相男氏が、同十三・十四年は柴田実氏を中心となり、発掘調査が進められた。その結果、大津京跡を解明するまでには至らなかったが、多くの成果が得られたことはよく知られているところである。その後、両寺院跡はいずれも国史跡の指定を受け、大切に保存されている。さらに、出土品のなかでも、崇福寺塔心礎から見つかった舍利容器などの納置品は国宝の指定を受け、白鳳時代の軒丸瓦類や施釉陶器・銅製品など、主なものは大津市指定文化財となっている。

この両寺院跡からの出土品は、国宝「崇福寺塔心礎納置品」や大津市指定文化財の考古資料のほかにも、瓦類を中心に膨大な量があり、近年まで近江神宮が所蔵し、一部を境内にある時計博物館で展示していた。現在は、大津市歴史博物館が近江神宮から国宝「崇福寺塔心礎納置品」を除くすべての資料の寄託を受け、常設展示等に活用している。だが、戦前の調査後に刊行

された報告書以降、まったく資料整理が行われておらず、研究者等が利用できるような状態ではなかった。当館では、近江神宮から上記資料の寄託を受けたのを契機に、平成五年度から整理作業に着手し、本年度でほぼ完了する予定である。その成果については、一部をすでに『大津市歴史博物館研究紀要1』（一九九三年）、「同研究紀要2」（一九九四年）で報告しているが、最終的には、一冊の本にまとめて刊行する計画である。ここでは、今までの整理をもとに、近江神宮所蔵考古資料の概要を紹介する。

(一) 近江神宮所蔵考古資料の内容

先にも述べたように、近江神宮所蔵考古資料には、実に多種多様な遺物が含まれており、出土遺跡も崇福寺跡・南滋賀町魔寺の両寺院跡のほか、南滋賀遺跡及び滋賀里遺跡（弥生土器など）、滋賀里の山手一帯に築造された古墳時代後期の群集墳（須恵器類やミチユア炊飯具形土器など）といったように、大津市北郊地域に広がっている。だが、何と云っても、その中心は崇福寺跡・南滋賀町魔寺の両寺院跡から出土した遺物であり、その大半は瓦類が占めている。

瓦類には、両寺院の創建期にあたる大津京時代前後の白鳳期の瓦類を中心に、奈良時代末〜平安時代前半（八世紀末〜九世紀）と平安時代後半（十一〜十二世紀）の瓦類も比較的数量多く含まれており、両寺院の変遷を考える際のよい資料といえる。また、両寺院からは、瓦類以外にも、佐波理製銅鏡・銅匙・瑞花双蝶文八花小鏡・皇朝十二銭（崇福寺跡）、三彩盤・脚付盤（南滋賀町魔寺）、塑像片（南滋賀町魔寺・崇福寺跡）、埴仏・泥塔・陶硯（崇福寺跡）などあり、いずれも両

寺院の性格を示す遺物として注目されている。現在の整理作業は瓦類を中心に進めているので、次に瓦類の概要について見ていくことにする。

(二) 瓦類

瓦類は、前述のように、創建時期の白鳳期をはじめとする三時期に大きく分かれる。最もよく知られているのは創建期の瓦類で、あとの二時期のものは、いずれも堂舎改修時の差し替え瓦、あるいは新しい堂舎建立時に使用されたものと考えられ、両寺院とも、創建後、少なくとも二回の改修があったようである。

まず、白鳳期の瓦類についてみていくと、軒丸瓦は大きく分けて二系統に分類される。一つは、瓦当部直径が二十cmを超える大型の単弁系軒丸瓦、もう一つは瓦当部直径が十五〜十八cm前後の複弁系軒丸瓦である。前者は崇福寺跡にはみられず、すべて南滋賀町魔寺出土品であるが、同系統の瓦は、すぐ北の穴太で近年発見された穴太魔寺からも出土している。さらに、琵琶湖の対岸、草津市北大萱町にある宝光寺跡からも、近年の発掘調査で、同系の単弁系軒丸瓦とともに、一点だけだが方形瓦片が出土しており、南滋賀町魔寺や穴太魔寺との関連性が注目されている。また、この系統の中には、南滋賀町魔寺からだけ出土するといわれている方形軒先瓦（通称「サソリ文瓦」）も含まれる。この単弁系軒丸瓦とセツトになる軒平瓦は素文の瓦当部をもった方形軒平瓦で、丸瓦・平瓦にあたる、断面が凹・凹形を呈した大型の方形瓦も大量に出土している。後者はすべて川原寺式の複弁八葉蓮華文軒丸瓦の系統に入るので、瓦当部及び中房の規模、蓮子数、蓮弁の形態、外区外縁の文様などから、五型式十種類に

分類した。これとセットになる軒平瓦はいずれも重弧文軒平瓦であるが、出土量は極端に少ない。なお、複弁系軒丸瓦は崇福寺跡、南滋賀町廃寺とも出土しているが、大半は南滋賀町廃寺のもので、崇福寺跡からはほとんど出土しない。崇福寺跡から、複弁系軒丸瓦・重弧文軒平瓦をはじめとする創建期の瓦類がほとんど出土しないことは早くから指摘されていた事実で、椀皮書など、瓦を使っていない堂舎が中心であったと考えられている。

次に、比較的多く出土する瓦類は、奈良時代末〜平安時代前半の時期のものである。まず、軒丸瓦では、大半が単弁系に属するが、瓦当部の蓮弁の形態、外区内縁の文様などから、大きく三系統に分類できる。一つは単弁蓮華文系で、次が蓮弁の代わりに唐草文を配した唐草文系、そして外区内縁に流雲文を巡らせた流雲文縁系。単弁蓮華文系は三型式五種類、唐草文系は二型式、流雲文縁系は一型式のみで、単弁蓮華文系のA2型式・C型式、唐草文系のD1・2型式、流雲文縁系のE型式と同型か、同系統とみられる軒丸瓦が近江国府跡及び、その周辺の南郷田中瓦窯跡・堂ノ上遺跡（勢多駅家跡）、石山国分遺跡などから出土している。この時期の両寺院、特に南滋賀町廃寺の性格を考えるにあたって、近江国府との関連でながめていく必要があるといえる。

最後に、平安時代後期の瓦類については、先の奈良時代末〜平安時代前半のそれに比べ、出土量はかなり少ない。現在、整理中のため詳細は後日に譲るが、軒丸瓦はいずれも小型で、瓦当部の文様から四〜五種類に分かれるようである。その中で出土量が最も多く中心となるのは、瓦当部が十四cm前後の複弁八葉蓮華文

の形態をとるもので、中房は二重の線であらわし、内側は花卉状を呈している。蓮弁は細くかつ小さく、外縁内側の傾斜面に珠文を配する。これとセットになるとみられる軒平瓦も小型で、薄手の作りである。瓦当部の唐草文は彫りが浅く偏平で、文様を彫った版型が「瓦当面に正確に押されている例が少なく、ずれているものがかなり存在している。

このように、両寺院跡からは、平安時代に属する瓦類が比較的多く出土しているが、どうしても白鳳期の瓦類ばかりが取り上げられるため、従来からあまり注目されることがなかった。だが、まだまだ謎が多い両寺院の変遷を考えていく上で、平安時代の瓦類は欠くことのできない資料であり、いま続いている整理作業を完了し、できるだけ早い時期に報告したいと考えている。

(松浦俊和)



れきはインフォメーション

8 第121回土曜講座 新発見の 大津の仏像 1
土〇博物館で行なった大津市内仏像調査の成果を報告します
13時30分～15時

13 第38回親子歴史講座 立版古をつくろう
土〇江戸から近代にはやった、紙模型にしてシオラマの立版古を作ります
10時～11時30分

20 第122回土曜講座 新発見の 大津の仏像 2
土〇7月6日開講講座の続編です
13時30分～15時

3 第123回土曜講座 奈良時代の崇福寺―大津京の寺院、その後―
土〇崇福寺造営の経過とそこで営まれた法会について考えます
13時30分～15時 講師：櫻井信也(浦生町史編纂室事務嘱託員)

10 第39回親子歴史講座 昔の遊び道具を作る
土〇自分だけの玩具を作ってみませんか？材料は木などを使います
10時～11時30分 講師：安田貴紀子(奈良大学文学部史学科鎌田研究室研究員)

24 25 夏休み特別講座―機織りを体験する
土 日 〇2日間わたって、昔話でよく知っている機織りを体験します
13時30分～15時 講師：横田洋三(滋賀県文化財保護協会主任技師)

31 第125回土曜講座 大津市内の発掘成果
土 〇市内発掘成果の最新情報を発表します
13時30分～15時 講師：大津市文化財保護課技師

7 第126回土曜講座 近江の古墳時代
土 〇近江の古墳時代の特色をわかりやすく紹介します
13時30分～15時

14 第40回親子歴史講座 拓本に挑戦
土 〇博物館周辺の碑などを使って拓本とりの実演と体験をします
10時～11時30分

21 第127回土曜講座 大津にもある江戸時代の有名画家とその作品
土 〇あなたの身近にあるかもしれない、実はかつての名画人の作品を紹介
13時30分～15時

28 第128回土曜講座 近江の秋祭り
土 〇滋賀県内で行なわれる秋祭り。その様々な姿を紹介します
13時30分～15時

くんのための臨時休館
7/28日～8/1日

収蔵品紹介 24

東海木曾両道中懐宝図鑑

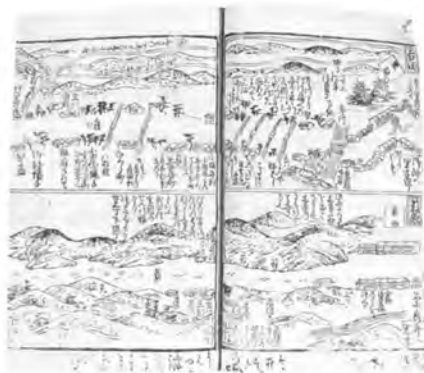
版本 明和二年版

縦一六〇 横一一〇 平井貞男氏寄贈

江戸時代後期の明和二年(一七六五)に出版された旅の案内書。表題のとおり、東海道と木曾街道(中山道)の道中案内で、懐に入れて旅先に持っていきけるように、版形も小さくしてあります。表題にある「懐宝」とあるのはそのことです。版元(出版社)は日本橋南一丁目の須原屋茂兵衛。この本の構成は、紙面の上段東海道、下段に木曾路の宿場と道筋を書き、沿線の名所や風景をイラスト風に仕立てて図示しています。また東海道は江戸日本橋から大津へ、木曾路は京都三条大橋から江戸板橋までと、上り下りを逆にしてあります。この本は非常に人気があったようで、そのことは明和二年を初版として、天明六年(一七八六)、寛政七年(一七九五)、同十一年、文化四年(一八〇七)、天保十三年(一八四二)と、実に五度に渡る増刷りを行っていることから分かります。

さて、寄贈を受けたこの明和二年版が興味深いのは、当時この本を持って旅をした人が旅先でこまめにメモを書き入れていることです。各宿場で宿泊した旅籠屋の名前の他、たとえば木曾路の鳥居峠から御嶽山がよく見えたと、浅間の社が立派だったとか、また東海道の赤坂を過ぎたあたり直筆の高札があったとか、江戸増上寺の近くに描かれた金杉橋の欄外には「金杉 やけど(火傷)のまじない」などといった庶民信仰に関する記述もあり、当時の旅人が何を体験し、また何に感動したのか、といった事柄を実に詳しく窺うことができます。

(植爪 修)



※講師名を記していない講座は本館学芸員が担当いたします
※いずれの講座もハガキにて、お申し込み下さい